

十三湊の「みなと文化」

石山 晃子

目 次

第1章 十三湊の整備と利用の沿革.....	5-1
1. 古代	5-1
2. 中世	5-1
3. 近世	5-2
4. 近現代	5-3
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	5-4
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」 ..	5-4
(1) 芸能－民謡	5-4
(2) 言語－方言	5-5
(3) 信仰	5-5
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	5-6
(1) 物資の流通を担う産業－運行制度	5-6
(2) 交易物資の保管施設	5-7
(3) 行政施設	5-7
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	5-8
(1) 港湾利用産業	5-8
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、	
人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	5-9
(1) 文芸－来遊文人	5-9
(2) 祭り	5-10
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	5-11
(1) 港発祥の地／港・海運に関する歴史的施設／港町の町並み	5-11
(2) 港の景色	5-13
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	4-14
〔参考文献〕	4-15
〔HP関係図版等出所〕	4-15

所在地：青森県五所川原市

港の種類：港湾跡

港格： —



【位置図】



【現況写真】

(http://www.rekihaku.ac.jp (旧市浦村提供))

第1章 十三湊の整備と利用の沿革

1. 古代

「日本書紀」斉明天皇4年(658)夏4月条によると、阿倍比羅夫が有間浜(ありまのはま)において、渡島(わたりしま)の蝦夷を集めて饗応したとされ、この場所を十三湊に比定する説があるが、定かではない。

2. 中世

13世紀前半には、前潟に面する地区＝近世の十三町の町並みがある場所に港町の形成が始まり、13世紀後半には、のちの安藤氏の政庁がおかれる一帯に屋敷群が形成されていった。外洋につうじる水路(前潟)に面して船着場がつくられ、周辺に海運や商業にたずさわる人々が集住、隣接して領主居館が設けられるという、中世における典型的な港湾都市であった。十三湊の最盛期は、南北朝・室町時代の14世紀後半から15世紀前葉にあたると思われる。室町時代、「日之本將軍」と呼ばれた蝦夷の系譜を引く在地豪族である安藤氏の嫡流下国安藤氏が十三湊に本拠を置き、北は北海道、南は若狭に至る日本海一帯を広大な活動範囲としていた。しかし、応永年間(1394～1428)の半ばに始まった、下国安藤氏と南部氏との抗争による安藤氏の敗北と本拠地十三湊の放棄により、十三湊の繁栄は長くは続かなかったとされる。

十三湊の確実な文献上の初見は、応安4年



【中世国際港湾都市 十三湊遺跡】

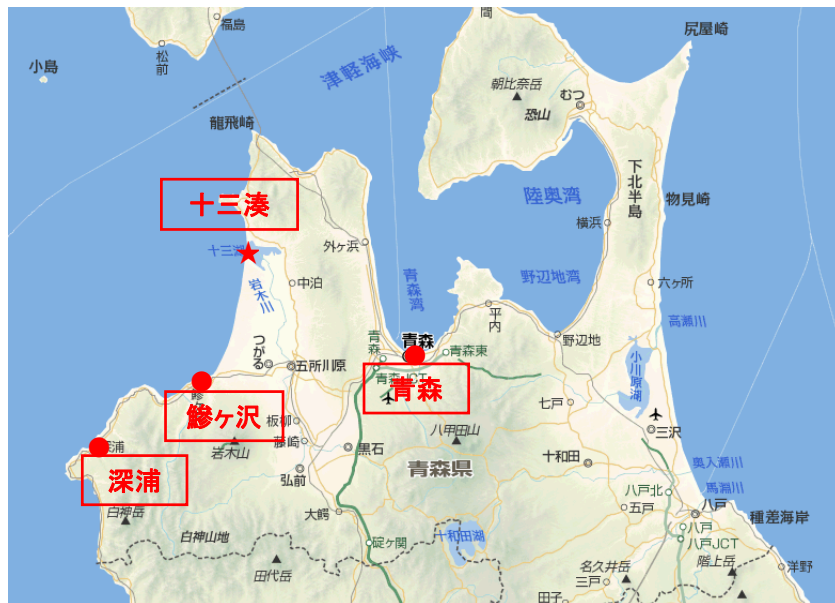
((社)五所川原市観光協会、『五所川原市の歴史と観光のテキストブック』より)

(1371)である。周防国高尾山常燈寺の住僧快印が願主となり、大般若經書写事業を行なった。そのうち、応安4年に書写された巻三百九十九奥書に「右筆、奥州津軽末十三湊住呂仏子快融」とみえるもので、当時の日本海を通じたネットワークのありようを示すものである。

また、十三湊は、文明年間(1469～87)に成立したとされる「廻船式目」において、「三津七湊」の一つに数え挙げられており、当時の日本における有力な湊と認識されている。

3. 近世

近世の十三湊は青森・鯨ヶ沢・深浦とともに四浦と呼ばれ、弘前藩の支配下にあった。



【十三湊、青森、鯨ヶ沢、深浦の位置】

十三湊は、津軽領内からの蔵米や材木移出のための中継輸送の港として、また北前船の寄港により、上方からは木綿・古手・茶・醤油などの日用品が移入される湊として賑わった。

十三湊は岩木川舟運と日本海海運を結ぶ「川湊」としての機能が期待され、岩木川流域の米を集め十三湊に川で下し、さらに西浜の鯨ヶ沢湊に回漕する「十三小廻し」(じゅうさんこまわし)が行なわれた。

現在の水戸口の南に連なる前潟・セバト沼・明神沼(P.5-11 参照)は、旧水戸口の水路跡で、前潟が河港として利用されていた。しかし、湊口に砂が堆積することから、湊としての条件は恵まれたものではなかった。水戸口は西風が強い場合、波浪のため閉塞し、十三湖の水位の上昇により岩木川流域に湛水被害を与えた。これを改善するために改修工事が何度も試みられ、水戸口の移動も度々行なわれた。十三湖と日本海を結ぶ水戸口は、南から北へ移動したと考えられている。水運路としての岩木川の悪化や駄下の展開による川下げの衰退により、十三湊と小廻し体制はしだいに衰退していくこととなった。

4. 近現代

十三湊が商港としての役割を失ったのは、近代に入り、蒸気船が増加し、土砂の堆積で水深が浅くなり、港への船の出入りが困難になったことに加え、明治 42 年（1909）の十三湖北岸と青森貯木場を結ぶ津軽森林鉄道の開通により、木材の輸送が船から森林鉄道にとってかわったことによるとされている。

昭和 34 年（1959）9 月に、十三湖の河口にはじめて架橋された。この十三橋は木橋としては全国屈指の規模であったが、老朽化と自動車交通量の増加に対応するため、昭和 54 年（1979）に現在の十三湖大橋に架け替えられた。

十三漁港は、昭和 27 年（1952）に第 1 種漁港に指定された。十三漁港は、日本海側ではなく、十三湖水戸口の天然の良港として利用されている。汽水湖である十三湖ではヤマトシジミが多く漁獲され、全国第 2 位の生産量を誇り、市浦地区の重要な地域資源となっている。

十三湊は日本中世史上、非常に重要な港湾都市遺跡として注目され、平成 3～5 年度に国立歴史民俗博物館により十三湊遺跡の調査が行なわれて以来、平成 6 年度からは旧市浦村が、平成 7 年度からは青森県教育委員会が十三湊遺跡の発掘調査に着手し、遺跡の実態解明に取り組んだ。平成 17 年 7 月 14 日には、十三湊遺跡が国史跡に指定され、現在も調査が進められている。



【十三の砂山公園より現在の水戸口を望む】（筆者撮影）

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 芸能—民謡

①十三の砂山

五所川原市（旧市浦村）十三地区に盆唄として伝わるものに「十三の砂山」（とさのすなやま）がある。

- ・十三の砂山ナーア ヤーエ 米ならよかるなナー
西のナア 西の弁財衆にゃイ たーだー積ましょ たあだ積ましょ
西の弁財衆にゃー アーイ 西の弁財衆にゃイ たーだー積ましょ たあだ積ましょ
- ・つつじ椿はナーア ヤーエ 山でこそ咲くがナー
今はナア 十三船の とともに咲く とともに咲く
十三船の 十三船の今はナア 今日を訊ねて とともに咲く とともに咲く
- ・十三を出るときゃナーア ヤーエ 涙出てもナー
尾崎かわせば 先や急ぐ 先や急ぐ かわせばナーヤ かわせばお崎ナー
お崎かわせば 先や急ぐ 先や急ぐ

（『西浜と外ヶ浜の民俗』）

「十三の砂山」は、いつ、十三に入ってきたか詳細はわからないが、旅行家である菅江真澄の日記「外浜奇勝」に、「十三の砂山」に関して、地元の人とのやりとりがあり（寛政8年〔1796〕6月21日）、この頃にはすでに広く唄われていたことがわかる。

やがて三箇田に別れようというとき、「北方に遠く眺められる低い赤土の山は、どこの何という山ですか」とたずねた。すると、うしろから馬にむちうって走り過ぎようとした者が、「十三のすな山米ならよかる、のぼる大船人にやただつませよ」としわがれ声で歌うので、これが十三のすな山だと知った。

（内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記3』平凡社 2000）

「十三の砂山米ならよかる」の歌詞には類歌が他の地方に多く、山形県酒田の「酒田節」では「酒田興屋の浜米ならよかる西の船頭衆にやただ積ましょ」となっている。ほかにも新潟県中頸城郡あたりの「米大舟」、鹿児島県種子島の「坂田節」などの類歌があり、海運がさかんだった時代の民謡の運搬が考えられる。

「十三の砂山」は、哀愁を帯びた悠長な曲調が特徴的で、戦後、代表的な津軽民謡の一つとして、全国に知られるようになった。現在でも、五所川原市（旧市浦村）十三地区では「十三の砂山まつり」が行なわれ、盆踊り唄として歌い継がれている。



【十三の砂山碑】（筆者撮影）

（２）言語一方言

十三湊の位置する西津軽地方の日本海沿いでは、起キレ・見レなどのように一段活用動詞の命令形が用いられる。これは、南は秋田県と通じ、北は北海道とも連続する特色である（此島正年「青森県の方言」）とされ、かつての海上交通によるものが大きいと考えられる。

（３）信仰

①浜の明神（湊明神宮）

浜の明神は中世における水戸口付近の丘陵に位置していた。安芸の厳島神社の分霊を祀ったともいわれ、航海の守護神であると同時に、灯台の機能をもった宗教施設と考えられている。

延宝４年（1676）の創建とされる現在の湊明神宮の所在地が浜の明神跡と伝えられ、現在でも「出船入船の明神」として、漁業関係者に信仰されている。



【浜の明神跡】（筆者撮影）

②山王坊日吉神社（さんのうぼうひえじんじゃ）

十三湖の北岸、五所川原市相内地区に山王坊日吉神社がある。周辺一帯は「山王坊」と呼ばれ、古くから霊地として崇敬されていた。昭和５７年に行なわれた第１次発掘調査により、神社仏閣の礎石跡や室町時代の遺物が出土し、安藤氏に関係する中世の宗教施設であると考えられている。山王造りの二重鳥居は近隣にはみられない珍しいものである。



【山王造りの二重鳥居】（筆者撮影）

2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

（1）物資の流通を担う産業—運行制度

①十三湊への入港

慶安2年（1649）の「津軽領分大道小道磯辺道并船路之帳」（弘前市立弘前図書館蔵）によると、当時の十三湊の広さは90間、湊の遠さ（奥行き）は1里23町であった。500石積、700石積の空船であれば140～150艘以上入港することができた。しかし積み荷を満載した大型船の場合は、沖で通船に荷物を積み渡してからでなければ入港できなかった。また西風や南風の時は湊口に砂が堆積し、空船でも出入港できないこともあったという（承応2年〔1653〕「津軽領道程帳」弘前市立弘前図書館蔵）。

近世の十三湊は、水深こそ深くはないが、むしろ砂の堆積に度々悩まされ、これが十三湊の港としての機能を衰退させる大きな要因となった。



【正保2年 陸奥国津軽郡之絵図より十三湊付近（部分）
青森県立郷土館蔵】

（『青森県史 資料編 近世1 付図』より）

②十三小廻し体制

十三湊は湊口が浅いために、荷を積み替えて空船で入港しなければならないという、不便な状況であったため、弘前藩では「十三小廻し」という中継輸送体制を採用した。

十三小廻しとは、弘前藩領内十数か所の小蔵に収納された年貢米が、岩木川沿岸の「御米蔵」に集められ、そこから川船で岩木川を下って、十三湊まで運ばれる。そして十三湊で「小廻船」に積み替えて鯺ヶ沢湊に廻漕し、鯺ヶ沢湊から上方へ廻米を行なうものであった。

しかし、水運路としての岩木川の悪化や駄下の展開による川下げの衰退により、十三湊と小廻し体制はしだいに衰退していった。

（２）交易物資の保管施設

①御蔵

岩木川舟運により集積した年貢米が収納された藩営蔵で、慶安元年（1648）の「奥州十三之絵図」（函館市中央図書館蔵）に「御蔵」が描かれている。寛文４年（1627）に十三蔵奉行が置かれ、周辺村からの年貢米の収納と保管を行った。

（３）行政施設

①十三町奉行所

貞享４年（1687）「検地水帳」（「陸奥国津軽郡御検地水帳」弘前市立弘前図書館蔵）に「屋敷 貳拾三間 拾壺間半 壺担五畝拾四歩 町奉行役屋敷」とあり、跡地は五所川原市市浦十三字深津に比定される。江戸中期頃には、奉行２人、町同心警固・町同心・町年寄共８人、名主２人、別段取締役１人が置かれた。

②遠見番所

正保２年（1645）の「陸奥国津軽郡之絵図」（青森県立郷土館蔵）に、船が出入りする水戸口の付近に「遠見番屋」が描かれている。貞享４年の「検地水帳」には「屋敷 壺間壺歩」とあり、跡地は五所川原市市浦十三字深津に比定される。

③湊番所

貞享４年の「検地水帳」には「屋敷 拾間 拾間 参畝拾歩 湊番所」とあり、跡地は五所川原市市浦十三字羽黒崎に比定される。

④沖横目

寛文３年（1663）２月１５日に十三に沖横目が任命されている。沖横目は沖御番所に赴任し、物資の流出入や十三湊や日本海を通る密移出入船の取締り、遭難船の監視などを行ったと考えられる。



【十三之図（「御国縮図并弘前之図其外所々之図」弘前市立博物館蔵）】
（『青森県史 資料編 近世2』より）

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（1）港湾利用産業

①造船業

「十三之図」（「御国縮図并弘前之図其外所々之図」弘前市立博物館蔵）のうち、明治5年〔1872〕には、水戸口の付近に「舟合場」と記されている。貞享3年（1686）には1,700石積の船が造られた（弘前藩庁日記「国日記」）。これらの新造・修復のために、藩は小泊から木材を、蟹田・奥内から鉄を廻漕させた。

②漁業

・十三湖のシジミ

十三湖は海水と淡水からなる汽水湖で、ヤマトシジミが多く採れることで全国的に有名である。

十三湊が繁栄していた頃には、シジミはなかったという。それが、突然の大津波で多くの人々が亡くなり、山から飛んできたカラスがそれを嘆いて泣いた。その時の涙が十三湖に落ちてシジミになったと古くから言われてきたとされる。

現在、十三湖のシジミ産出量は年間約2,600トンで、市浦地区の基幹産業でもある。シジミに含まれる栄養素が評価され、健康ドリンクや佃煮などさまざまな加工品が製造されるほか、地元の食堂や道の駅などで出されるシジミを使ったメニューは観光客にも好評である。



【十三湖のシジミ】
（五所川原市 HP(特産品)より）

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

(1) 文芸—来遊文人

①菅江真澄

国学者で旅行家の菅江真澄は、寛政8年（1796）6月27日に、十三の町に入り宿泊している。船渡しの様子などを次のように記している（「外浜奇勝」）。

羽黒崎も過ぎて、百尋ばかりもある、三本よりあわせた綱をひきまわした渡し舟に、馬も人もおり重なるように乗って危げにわたしている光景がおもしろかったが、見ている心地もしないで、十三の港の部落にはいつて、能登屋という間屋に宿をもとめた。

（内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記3』平凡社 2000）



【十三湖水戸口の渡し付近（「合浦山水観」 弘前市立弘前図書館蔵）】
（『中世国際港湾都市十三湊と安藤氏』1998 青森県立郷土館より）

②松浦武四郎

幕末の旅行家で、数度にわたり南部、津軽を訪れた松浦武四郎は、十三の賑わいぶりや産物を次のように記している（嘉永3年〔1850〕「東奥沿海日誌」）。特に、十三湊は山形の酒田湊よりもよい川湊であると評している。

十三浦 （中略）此处濱形北西向。東権現岬西鯨ヶ沢岬と対峙して一湾をなすの内也。海岸皆沙地にして碇懸り不宣。人家三百軒斗。一條の街をなし農戸漁擔商家の交わりにして繁花の処なり。

潟 有。長七里、幅式里半三里位にして国中に距る。此潟の上は岩木川より流入る。并領内中の小流皆末流は爰に至る也。其形前に図する如し。

土産 鯛 鰯 比目魚 蛸 カスベ 其外雑魚多し。

但し右の分は海辺にてなり。又

八ツ目鰻 鱈 いな ぼら 鮒 小海老等、是は潟にて取る也。因ニしるし置もの也 (中略)

川 渡し有。此川潟の末口にして幅凡六七十間。少し雨降つゞかば百間余にもなる由聞り。深サ凡八尋位の処有よし聞けり。(中略) 扱船澗と云もなけれ共、此所川湊にして北国坂田の如き乗入口也。しかし坂田よりハ大に又乗よき処也。八百石千石位の船皆此船渡しの処迄入るによろしく、三百石位の船は澗の内に入って荷役をする也。

(吉田武三編『東奥沿海日誌』時事新書 1969)

③伊能忠敬

伊能忠敬は、享和 2 年 (1802) 8 月 21 日、手分けして十三潟の潟縁を測量した後、潟へ船でおりて、十三町に入り、能登屋金右衛門に止宿している (「沿海日記」)。

④吉田松陰

吉田松陰は、嘉永 5 年 (1852) 3 月 4 日、十三湖を通過しており、「山は潟に臨みて岩城山に対し、真に好風景なり」と、小高い山から十三湖をはさんで岩木山を望むよい眺めを記録に留めている (「東北遊日記」)。

⑤太宰治

五所川原市金木出身の小説家太宰治 (1909—48) は小山書店から依頼され、「新風土記叢書」の一冊として紀行文風の作品を執筆した。長編小説「津軽」である。

昭和 19 年、太宰は取材のため久しぶりに帰郷し、5 月～6 月にかけて津軽地方を旅行しており、中里から小泊までバスで行く途中の十三湖について、

やがて、十三湖が冷え冷えと白く目前に展開する。浅い真珠貝に水を盛ったような、気品はあるがはかない感じの湖である。波一つない。船も浮んでいない。ひっそりして、そして、なかなかひろい。人に捨てられた孤独の水たまりである。

と書いている。

(2) 祭り

①十三の砂山まつり

江戸時代から歌われてきた盆踊り歌として継承されており、現在は、五所川原市 (旧市浦村) 十三地区で毎年、8 月 14 日から 16 日まで開催されている。盆踊りのほかに、大漁祈願祭なども併催されている。



【十三の砂山まつり】
(〔社〕五所川原市観光協会 HP より)

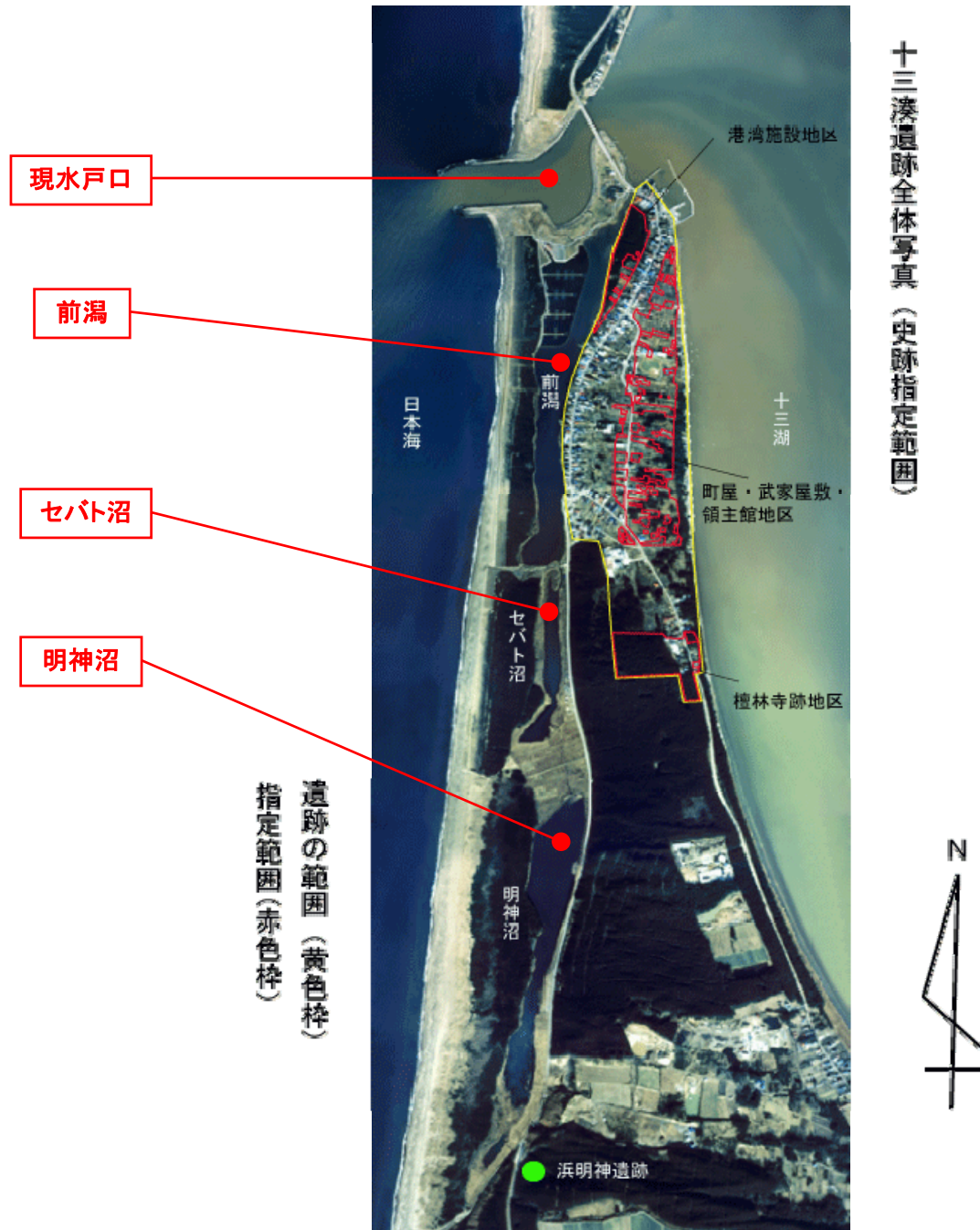
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

（1）港発祥の地／港・海運に関する歴史的施設／港町の町並み

〔中世〕

①国史跡 十三湊遺跡（所在地：青森県五所川原市十三地内）

十三湊遺跡は、中世にはじまる典型的な港湾都市の一つとして国史跡に指定されており、その範囲は港湾施設地区、町屋・武家屋敷・領主館地区、檀林寺跡地区の3地区に定められている。



【十三湊遺跡の全体写真と史跡指定範囲】
（五所川原市 HP（文化・史跡）より）

1) 港湾施設地区 (39,875.20 m²)

十三湊の港湾施設、船着場の実態が解明された地域である。

前潟に面した浜地形を呈し、集落側から前潟に向かって緩やかな緩斜面上に礫を敷き詰めて足場を固めた荷揚げ場跡や、礫層が途切れる水辺からは土留めに利用された丸太材が見つかっている。また、かつては水中だった場所からは栈橋跡とも考えられる木杭列や、船をもやった縄も発見されている。

試掘調査の結果から、200mにも渡って礫層（船着場）が確認され、少なくとも15世紀前半の大規模な港湾施設であることが判明している。



【礫敷遺構（荷揚げ場跡）】
（五所川原市 HP(文化・史跡)より）

2) 町屋・武家屋敷・領主館地区 (140,424.51 m²)

ほとんど宅地化されることなく、十三湊において、遺構の保存状態が最も良好な区域である。中世の地割を多く残した畑地が広がり、湊町の景観を体感できるような区域で、中世後期の湊町の実像を明らかにすることができる全国的に見ても貴重な歴史的景観となっている。

遺構では十三湊のほぼ中央に東西方向に渡って大土塁と堀跡が現存し、遺跡を南北に分断している。土塁北側地区には領主館・家臣団屋敷といった支配者層の居住空間や工人集団の空間が推定されている。また、土塁南側地区では町屋敷が広範囲に渡って広がっていることが確認されており、一部は中軸街路に沿って整然と配置されている。



【町屋跡付近】（筆者撮影）



【領主館地区・旧十三小学校グラウンドの調査】
（五所川原市 HP(文化・史跡)より）

3) 檀林寺跡地区 (53,893.98 m²)

十三湊遺跡の南端、県道に面した場所に位置する住宅地や工場が所在する地区で、一帯は中世寺院跡である伝檀林寺跡が存在する地域である。（以上、五所川原市ホームページ文化・史跡案内による）

〔近世〕

中世からの町並みは、明暦3年（1657）以降、数度の火事で失われ、延宝年間（1673～81）には衰微したとされる。近世の集落は、十三湖の水戸口から十三道に沿って南に発達した。慶安元年（1648）の「奥州十三之絵図」（函館市中央図書館蔵）によると、河港に沿って町並みが形成されており、町の中央を「弘前海道」が通り、船渡しを利用して「小泊海道」へと通じている。町の中央を走る街道の東側には湊迎寺や願竜寺といった寺院がある。湊迎寺の入口の角が「能登屋」跡で、菅江真澄や伊能忠敬が宿泊した旅籠である（文政14年〔1831〕十三町家別軒数調書 弘前市立弘前図書館蔵）。また反対の河港側には、町奉行所、遠見番所などの行政施設があった。現在、集落の南北に走る主要地方道鰯ヶ沢蟹田線沿いの古中道に、北から十三神明宮、湊迎寺、願竜寺があり、近世の町並みは、現在の十三地区の家並みとほぼ重なっていることがわかる。



【町奉行所跡付近】（筆者撮影）

（２）港の景色

①唐川城跡展望台

唐川城は、十三湖の北岸にある標高160mの山城で、南部氏との戦いで、安藤氏はここを拠点に守り固めたと伝えられる。現在は山の中腹に展望台が整備されており、十三湖や岩木山、日本海が一望できる景勝地となっている。

【唐川城跡展望台】
（（社）五所川原市観光協会 HP より）

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

十三湊遺跡のこれからのありかたについて、五所川原市では発掘成果の公開や普及、さらなる調査研究や史跡の保存管理などを課題としている。また、十三湖一帯の環境や景観の保全に関しても配慮が必要としており、よりよい活用が期待される

平成 17 年の市町村合併により、十三湊の所在する旧市浦村は五所川原市となったが、同じく五所川原市と合併した旧金木町は、太宰治生誕 100 年に関連したイベントで県外から多くの観光客を呼び込んでいる。シジミ採りなどの夏の観光を主な産業としながらも過疎化が進む旧市浦地区においては、かつての日本海を通じた広範なネットワークを再活用することによって、十三湊をより PR し、地域の活性化につながるような新たな観光産業・文化事業を開催していくことなどが必要と思われる。

〔参考文献〕

- 『青森県史 資料編 近世1』(青森県 2001)
『青森県史 資料編 近世2』(青森県 2002)
『青森県の地名』(平凡社 1982)
『角川日本地名大辞典2 青森県』(角川書店 1985)
『青森県人名大事典』(東奥日報社 1969)
『青森県百科事典』(東奥日報社 1981)
『青森県「歴史の道」調査報告書 十三街道』(青森県教育委員会 1984)
長谷川成一編『街道の日本史3 津軽・松前と海の道』(吉川弘文館 2001)
長谷川成一ほか著『青森県の歴史』(山川出版社 2000)
長谷川成一著『弘前藩』(吉川弘文館 2004)
小口雅史著『津軽安藤氏と北方世界』(河出書房新社 1995)
『中世国際港湾都市十三湊と安藤氏』(青森県立郷土館 1998)
『青森県漁港の40年』(青森県漁港協会 1991)
飯豊毅一ほか編『講座方言学4-北海道・東北地方の方言-』(国書刊行会 1982)
青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編『青森県史叢書 平成二十一年度西浜と外ヶ浜の民俗』(青森県 2010)
『図説 五所川原・西北津軽の歴史』(郷土出版社 2006)
長谷川成一著『近世国家と東北大名』(吉川弘文館 1998)
仲井幸二郎ほか編『新装版 日本民謡辞典』(東京堂出版 1996)
豊島勝蔵著『十三村郷土史』(1982)
『国指定史跡 十三湊遺跡保存管理計画書』(青森県五所川原市教育委員会生涯学習課十三湊発掘調査室 2008)
『五所川原市の歴史と観光のテキストブック』((社)五所川原市観光協会 2007)

〔HP関係図版等出所〕

- P.5-8 【十三湖のシジミ】
http://www.goshogawara.net.pref.aomori.jp/16_kanko/tokusan.html
- P.5-10 【十三の砂山まつり】
http://www.go-kankou.jp/matsuri_event/index.html
- P.5-11 【十三湊遺跡の全体写真と史跡指定範囲】
http://www.goshogawara.net.pref.aomori.jp/16_kanko/bunka.html#8
- P.5-12 【礫敷遺構(荷揚げ場跡)】【領主館地区・旧十三小学校グラウンドの調査】
http://www.goshogawara.net.pref.aomori.jp/16_kanko/bunka.html#8
- P.5-13 【唐川城跡展望台】
http://www.go-kankou.jp/miru_manabu/shiseki.html